

No. 24 辻村染織有限公司

[事業実施テーマ]

巾着ポケット付き作務衣のブランド化と新販売方法の確立

[会社概要]

- 代表者名／代表取締役 辻村辰利
- 所在地／431-3115 浜松市東区西ヶ崎47
- 取材地／同所在地
- 設立年月／昭和25年10月
- 資本金／3,000,000円
- TEL／053-434-0035
- URL／<http://www.tsujimura-ai.net>



企業紹介



補助事業担当の辻村昌示氏

取り組みの経緯



藍染めした生地への織り工程

取り組みの内容



今回導入した藍染自動絞機

結果



今回開発した「巾着ポケット付き作務衣」

明治元年創業、藍染めの染織会社 肌触りや風合いを重視した生地づくり

明治元年10月創業の当社は、昭和25年10月に綿織物工場・辻村染織有限公司（資本金300万円）を設立。昭和54年から剣道着を作り始めると藍染め（草木染め）織りに専念しはじめ、昭和59年には刺子織りや二重織りの布での婦人服用服地や作務衣の製造をスタートさせた。

現在は、①藍染・藍染織物『遠州正藍（えんしゅうしょうあい）織物』の製造、②繊維製品の企画・製造・販売を主要事業とし、全国各地のお祭りの法被・腹掛け・足袋等に使用されている生地の藍染織布や、作務衣用の藍布（らんぷ）、アパレルメーカー向けの様々な藍染め生地を製造している。

その製品づくりは、①洗うほどに風合いが増してゆく味わい深い織物、②風合いを損なう樹脂加工は行わず、糸の段階で入念に水洗いし、布の段階でワッシャー加工（※）を行い、肌触りや風合い重視の仕上げ…を特徴としている。

※ワッシャー加工※

自動反転洗浄機（ワッシャー）で水洗いをして表面にシワをつけたり、シボを寄せたりして生地を加工することで、柔らかで自然な風合いになり、爽やかな印象を与える。

伝統の藍染技術を活かし、新商品開発へ ターゲットは、外国人・高齢者・若年者

当社では、明治より伝わる伝統の藍染技術に加え、糸はもちろんのこと、染め、織り、縫製に至るまで“全工程日本製”であることを誇りに事業を展開しているが、現在の染織業界は全国的に厳しい状況にある。

このようは背景下、新たな販路開拓、そして売上拡大を図るための市場分析が必要となり、取引先や購入者から要望を聴取するとともに、自社販売サイトにおいてアンケート調査を実施。

その結果、①外国人（日本文化ブームの中で、普段着やお土産として浴衣・着物が人気を博している）、②高齢者（オーガニックへのこだわり、肌触り・鮮やかにして優しい風合いがある和服を好む）、③若年者（浴衣や甚平など、古き良き日本文化への憧れとして和服が人気）…の三者をターゲットとした新商品開発を進めることとなった。

当社では、この新商品開発の実現化を図るため、今回、「巾着ポケット付き作務衣のブランド化と新販売方法の確立」をテーマに本事業に取り組むこととなった。

部屋着や外出着として人気の作務衣 新たな付加価値、それは巾着ポケット！

本事業の実施にあたり、当社が新商品開発のアイテムとして選定したのは『巾着ポケット付き作務衣』であった。

作務衣は、僧侶が日々の業務（掃除、薪割り、畑仕事など）寺院を維持するための労働）を行う際に着用する和服であったが、身体を締め付けず着用しやすいため、現在では僧侶固有のものとしてではなく部屋着や外出着として扱われることも多く、熱心な愛好者もいる。

当社では以前より作務衣の製造を行っていたが、近年の人気上昇に着目し、新たな付加価値を加えた『巾着ポケット付き作務衣』の開発を、本事業により藍染自動絞機を導入して進めていくこととなった。

その具体的な開発内容は、①従来の作務衣はポケットの口が閉まらず貴重品等を紛失する恐れがあったことから、巾着ポケットを付けて収納性を改善、②ソートンカラーや赤色縫い糸使用によるバリエーション拡大と若者向けの洋服風デザイン採用、③顧客からの認知度を高めるため、商品ブランド化を狙ったロゴマークの開発…であった。

染色スピードが従来機の2倍にアップ！ インターネットショップの活用で新展開

本事業の実施により得られた成果としては、①2本同時での染色が可能となり、染色スピードが従来機比の2倍にアップ、②糸の取り付けが1/3の労力で可能、③染色時の色むらは絞り込み調整機構により半減…が挙げられる。

特に、染色スピードが2倍になったことにより、従来生地の生産で手一杯であったところが、作務衣用生地の生産まで可能となり、余裕を持って作務衣のオリジナルブランド確立用のサンプル作製を行うことができた。

また、オリジナル商品であることをアピールするため、当社伝統のマークを中心に、「藍染」「社名」「日本製」をそれぞれ表記したロゴマークを製作した。

さらに、収納物の紛失を防止するためのポケットは巾着袋型にすることとし、現在、特許出願中である。

当社では、これまで卸業者に販売することが多く、中間マージンが掛かるため製品に拘ることができなかったが、本事業による新商品開発を契機に、今後はインターネットショップを積極的に活用し、製造直販を推進していく方針である。